

伊13
1833
8



特 13
1833
8



繪本右圖記第八之卷

目錄

信長攻齋居龍興

及吉郎龍衣稻葉山搦手

堀尾茂助導稻葉山城內

稻葉山之城陷落



子生瓢單之由來

信長發向勢州

山路彈正偽降信長

三好松永等弑君

三好松永確執

繪本左圖記卷之八

信長攻勢後龍貞

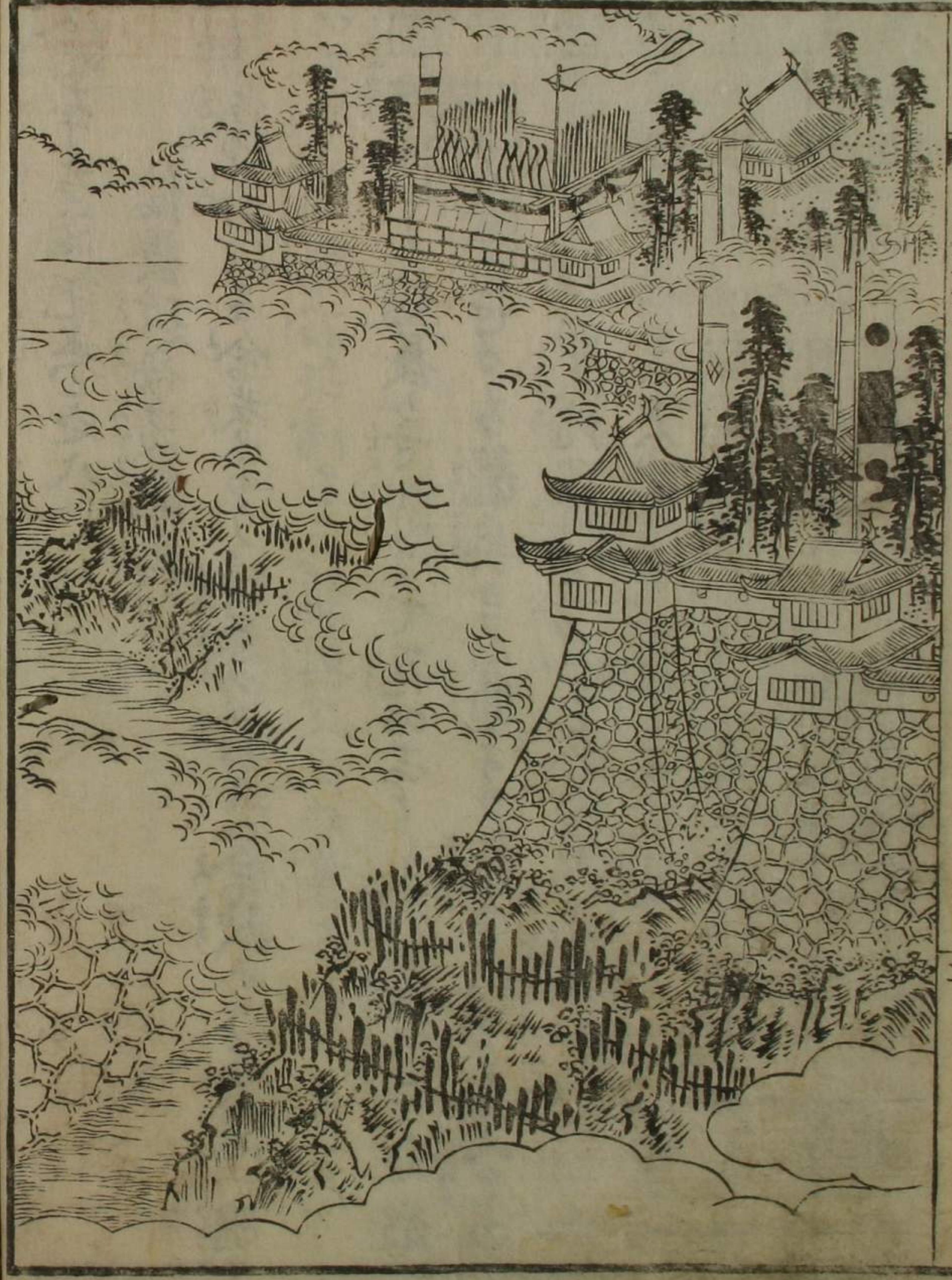
積善の家にも余夢あり積善の家にも余殃あり
 大守齋藤右兵衛左主龍貞又兄の業を継ぐ兵只り
 困強りしも信長が寸謀りて尾のおとく解塵のおとく教
 一討又滅せざるも龍貞へか不道より起るとも又兄の
 積善家より報ひ天地の間又一身を入るは不ち終る白刃
 の下に命を落し天地自物の理にて豈人力の及ぶべき
 又阿らんや拾後山守道三入道の素性を且つる不明
 の以て徳園編系山の城を後自全明衆とて智謀勇武
 乃良あり其威盛は隣國を思ひむ家より東西の國の健





信長
の
あ
ま
り
の
龍
真
及
れ

真田巴の古田



真田巴の古田

夢人松波勝九郎と云ふ者重十七歳とて明薛又仕智
略みとて明薛が秘葬の居て天文七年今例の城之長井秀
之を殺し長井新九郎秀龍と名宗は年又月明薛病よ
卒し嗣子は新九郎自稻系山の城主とたり母長山
城守と改むは九年英徳守國の死む去は太膳右大臣
を逐て國を奪取りは十七年別發して道三と号と男
子三人あり長子とて義龍と云ふ二男とて義平と云ふ三男を
義之と云ふ又道三義龍と不和りて二男義平を殺
智とせんといふ義龍を憐り弘治二年去は月道三遠
野又將と其隙は兩分を城中よ振と勇士日根中野
守に命じて救ふは道三入きたはり義龍を救んと勢

を傳りり又云余誘義龍却てせん余誘を多率一道三
が稻系山を攻む道三力尽討死と年六十三たり義龍
自立して稻系山の城主とて永禄四年七月熱病と死
て暴死とて嫡子家智を継ぐ英徳國を治む是則母
及右兵衛右主龍貞之此所英徳の三老臣とて國政と執り
者三人あり稻系保祿守安及保賀守氏は者淺及是
等之本下及右信長卿を進め計略を以て三老臣を味方
とす一永禄七年の秋九月母長龍貞が居城稻系山を
攻んとて先陣柴田隆六勝及二番英徳の三老臣三老
池田勘三郎森三左衛門右衛門右衛門右衛門右衛門
佐内秀助福富平左衛門右衛門右衛門右衛門中宗小八郎七

本下
夏吉
即
指
柴
の
樹
と
手
と
變



真蹟記初巻

九



真蹟記初巻

十

尾瀬
助
勇力



勇力

八



勇力

番名護屋孫三郎更子監物村并長門守林佐渡守八番
梁田右近遠山甚吉郎九番大沢治郎左の本下辰吉郎
十番信長卿の御旗本十隊の惣軍都て二万三千余騎
稻葉山と十番二十番と五圍と息をもはぶと攻りけり
堀中にも敵軍家譜代恩顧の郎等も必死の防戦此時
かりと鉄炮と放り矢石如雨令り塵埃よりも煙く我
と敵石よりも帯しと心を一鼓に我へを奪ひしも大軍之
とすとも負死人数を知りて左右なく落城と云き申すも
あつたるもしに攻りて三日と云く

本下辰吉郎襲撃稻葉山弱を

去程は信長の太軍稻葉山を攻りて三日に及んば

東國第一の名城一まを守るに美軍破り難き要害わつる
に勇烈の壯士必死の防戦を必しとる所容易落るべしといひ
びやつる本下辰吉郎は我いのさまをうらふ小此城力戦
とい叶はじと其夜城下の地理をたぬ城の弱をい候たる
るしよとくをりかたりとて刀も辰吉郎と針葉と葉に
已が攻りて舎す本下小市郎は謀りて其身は小上政勝
守又十郎加次田隼人稲田大炊正山新右衛門は此の
自後七人間道を経て籠りてとんと絡り腰は兵糧を
付大なる瓢箪と酒を入り十郎は脊負りて八月十
三日申の夜刻は隙を以て稲葉山と出りて峯はひす
細乃瓜稲葉山の後牧田と出りて中秋の月東にのり



堀尾為助
 頼久乃
 城内
 築く



恰も白昼のどくどく一足より破破と走り出さず岩石阻入踏と
総松柏茂密して月の光を度々反照す岩石即元素牙の輝きより
猿のどくどく木の根をえ付岩角を修む繩梯を拵じく人と
通し幸すして一箇の平地に出宿すく人々酒を呑み飯を
喰ひ暫く休息せしむに俄に本勢揺してきてまきむらり
の身負猪去砂を蹴立て何れ来る人ぐあいやと見れば
獵師を人然より馳来り身をうけて彼猪を喰ふと猪ふ
更なりて飛くを咽喉より吐くといふと五付山刀を援出し
二刀三刀突通せば猪いよしく押入り木の根岩石のきり
ひたひた縦横をうけけりしに次第くよ力盡す倒れ
て死しりり後者即此働きを見んと大に感へて近く居

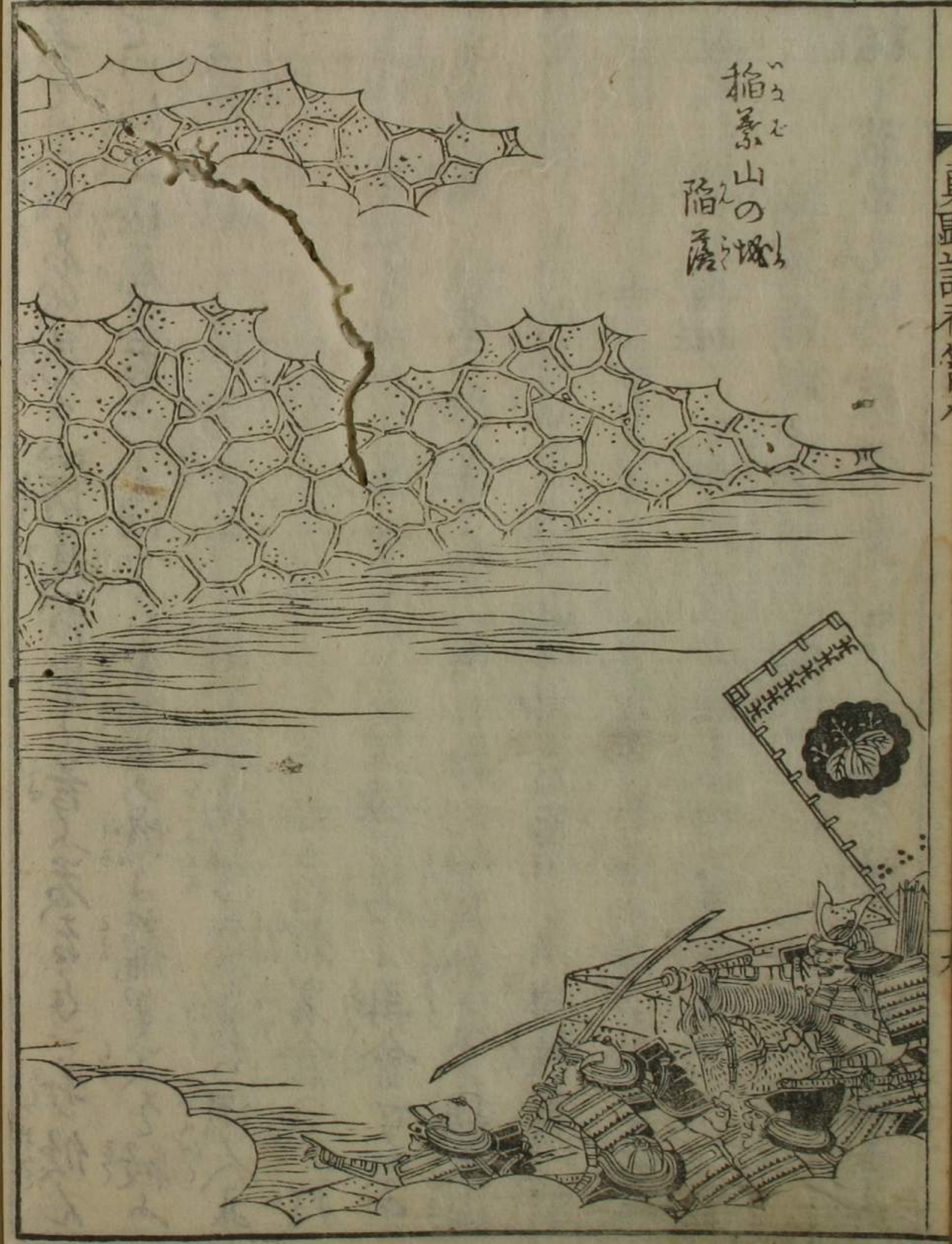
きて其姓名を尋ふと堀尾茂助と云ふ後者もと抄飲ん
で曰はば堀尾忠右のいほどく岩倉の城は龍牙を救ふ
て勇を破しりし事なかりけり堀尾もきて君い何人か
て我もさうな素性を知り給ふや後者曰我岩倉の合戦
に汝が勇壯を感じし軍中にて名を隠し出るとは汝私に
を頼み我信長の即等本下後者即之此度後者が堀尾山
を攻援んよ此破を凌ぎ城の搦手へ出んとは汝私に
と厭も道の案内をうききて懸賞をうき給ふと云ふ
女に依りて再拜して舎に宿し堀尾山へ守きける
堀尾茂助道中堀尾山内
叔も後者も後者も案内して道を迷はせし終に堀尾山

真景言不前ハ



指^へ系^と山^の
陥^しの^城
居^る

真景言不前ハ



の終頂より遙く山下を刃せしむるせば敵城の眼をみれば
 推量よ不遠擬はるは信廻と頼んで同心の兵二人もはじこま
 びてとて自ら後八人ら取りて帰隊よむるもれを大お余
 の細煙ありてはるるの石然いふいせんと頼隊一が小六郎加
 次回堀尾の三人侍よ生うる大木の柳を根もちもよ柳
 倒し毛鹿丸の掛をくこと八人何の若もなく城の中よ忍び
 入侍をきろと刃をくは難兵も十人余り兵糧を炊き
 けりし柴ありてれく那居る八人の勇士を刃接持を交を
 もりけり彼難兵を悉く切殺し具足を剥ぎ移し
 敵方の方の兵士よ似せ柴薪を積置る中へ悉く火を
 入飯櫃を拵攻に兵糧運ぶも換よりてはははの方

一急ぎなる城敵後方の軍勢散りて咎むる者もなきなり

稲葉山之城陥落

後者即ち後を絶し搦手より大手の帰隊一今安心
 して通して合守小市郎を始め味方の諸軍へ約定を定
 たり酒宴よ再ひし瓢箪を竹のさだは結び付帰隊
 るく揃出し八人の勇士水門の櫃を多しとげ小六政勝階
 出家より押入り討破とてとと揚て味方を拓くは下
 小市郎の兄後者が軍の瓢箪を刃るると等しくと通
 直水涉野弥を誘其勢都合百余人帰隊し押寄見
 さい小六郎水門より味方を拓くとと此不より表入とと
 程こそあれは年々雄の兵の城の中へ飛入く水門目掛け掛

入る城中を足令て之に發し其後炮矢石を飛しお控を
 とも折節を足令て其本郭の中へ火と指入るるに一日は
 燃より黒烟天を突涼しかす死あさまかしの城兵士
 又肝と冷し搦手へ敵入り勢を分て戦を罵るやど水
 門の防矢も打捨とをよりと強をとり其後より木下勢六
 百余入城中へ入り大門を開き鯨を作て切て血れ小田
 の大軍日く周を合せ我方と美入く老若男女
 の厭いさ切ましく戦いしとさほしうまし勢ひかり
 ま生瓢單之由來
 さらばに後龍貞頼系山の二の丸を敵のお討破ら
 且本丸に閉籠防を戦いとも終り落城討死と其後城空

め敵の戦を挑むる此稻系山の城下の百姓老幼
 多の籠物の用に立たれ者十又二三分けて後兵糧
 を費のちりそいこ茶より木下後吉郎さまく
 とらぐし其後のお士を欺き百姓城の中へ入る籠城乃
 候なりし此時より信長御より使者をきし齋後
 龍貞城を開き退まるとふゆいし攻口をひきき城中上下
 の男女悉く助命とらじ此の多くの軍民非命と死ん
 を歎くが故に若水引きよゆいし大軍一息採立て一人
 も残る踏浪長しとまへたれ龍貞大に候ひ助命の懸と
 謝して使者及び其翌日永禄七年八月十八日城を開
 きて退散を附賜ふ家人より後九郎右の長井隼人曰



克^く生^{せい}
 の^の軍^{ぐん}
 東^{とう}



飛騨守日根時成守日孫治方の板村半之助次等
又城を出る後終に三十余人僅に一國を余るに於て那
を志して進出する其外城中の軍民老幼男女も亦
まて己がさまぐ知れたる安よあひく英徳一國悉小田
又属し信長を脱限りなく功者も亦く忠愛を以て
就中本下後若流及征伐よあひく莫老の功ありて英徳
の内にて數多の地と下し揚里今度瓢箪の相争面白さ
競向を沢味方の吉兼あはれ此後例として馬車も團也
と信後されたるは若者面目を益し是より後瓢箪と馬車に
一戦功あり毎よ小瓢箪を一つ増する小瓢箪を生瓢箪と
く其名天下よ普く高し

信長勢別後向

小田と總兵信長は後居城頼系らに後を引ひ新よ
城を造営ありて号岐阜の城と云是より英徳尾張二國
の大守して諸士をたのめ百姓を安んずるに益す威
自整んちて震い懼むるもの此勢も亦して信長勢
又後向し小田一家を征伐めじとして永禄十年秋八月英
徳尾張の軍勢一万余騎を發し瀧川左近居城を名を
本陣として先きの兵三万余人捕七郎左の心具を籠る
八田の城を攻めし捕心具えより智謀強勇の良將を以
又百余人堅固な籠城し矢石も飛ぶ一層しく防ぎ戦へを
信長が先きの勢に憚んで是より信長郷里田坂并

池田等より余騎をよへて攻討しむ三おひしくと據り
 押寄敷百のを流一堵を討け軍烟の中より固を焼く據り
 五付系入んとは城中より捕り知して交換を用ひ死す
 て居りしを安んずるに五付中を日ごとく討ちしと橋より
 大木大石一はは落しけ長刀を等切落せ柴田池田が勢
 死傷の者数を知し信長急よ此城落すしきを急し復
 平たのまの鹽物三よ余人して押へ熱軍をきてる固の城へ
 向ひに方を圍で攻りける此城山路彈正盛信と勇ま
 る余人捕籠小田の大軍と幸もせは持は死守りま五
 膳まの死力を尽して防せられは此城又た右なるま
 中もあつて文湯西は傾けの要地石知の地りて後軍せんも

其勢はしと軍勢を引上げ素名の本陣へ移り給ふ
 よきそこの固の城を攻りしと軍物を押切は城外の
 民屋より忽火り出軍烟天に霞ふ小田の軍士大に
 兵いさる計をやら後けぬらんしとに進み戦ふ者
 是者即士率よ下知しそ味方の放火せんを計知り
 却て城中より火をうけ味方の兵士を惑し戦ひ
 せん敵の斗略とそもろぞ火を打捨て攻りけしと
 出せば此下知し融され柴田池田丹羽坂井其勢都
 余騎城のに方を鉄桶のぶつと圍み嘆き叫で攻り
 山路彈正の民屋(火)を放を敵討て引をりしと
 俄に合戦よ及びしに方よ下知して防ぎ戦ふと



信の
長
向
長

つるも見へざるも本下屋敷の容体は何ひ見此城の
 落んる夷坂井が攻にやあづかか合せ糸入中と佐内翁
 久前田孫に即諸も本林坂井がより加りう息も幾ど
 攻られ難なり又倉所攻落しや此城はより落らん
 と此をえん山路彈正大士の擣ふ兵士以上せ信長の陣
 に向ひ諸系被とて同攻られ後れ強くと大音とて鳴り
 くれ大士の大前田勝家此能信長へ云上丸右の攻
 只軍士公立使を望めて到るなりと申送りくれ後者等て
 今日前攻落るとき時と條で戦ひを止め退くがれ申やある
 先城を踏破り山路彈正を擣ふ其後攻られ強し強ふも
 運さゆめづる唯此後と攻落し一舉と城を系えべしと

夷坂井等と僅只一士軍を勵み攻り多信長御へ城
 山路彈正海系より使へくれ先攻られ強し敵の虚実と
 弱し手て攻るも安らばと度軍使を命て本下を制
 し強か後者即し今の治方なく軍軍をまよめ諸翁と共
 又大將の本陣へこそ集りたる

山路彈正信長

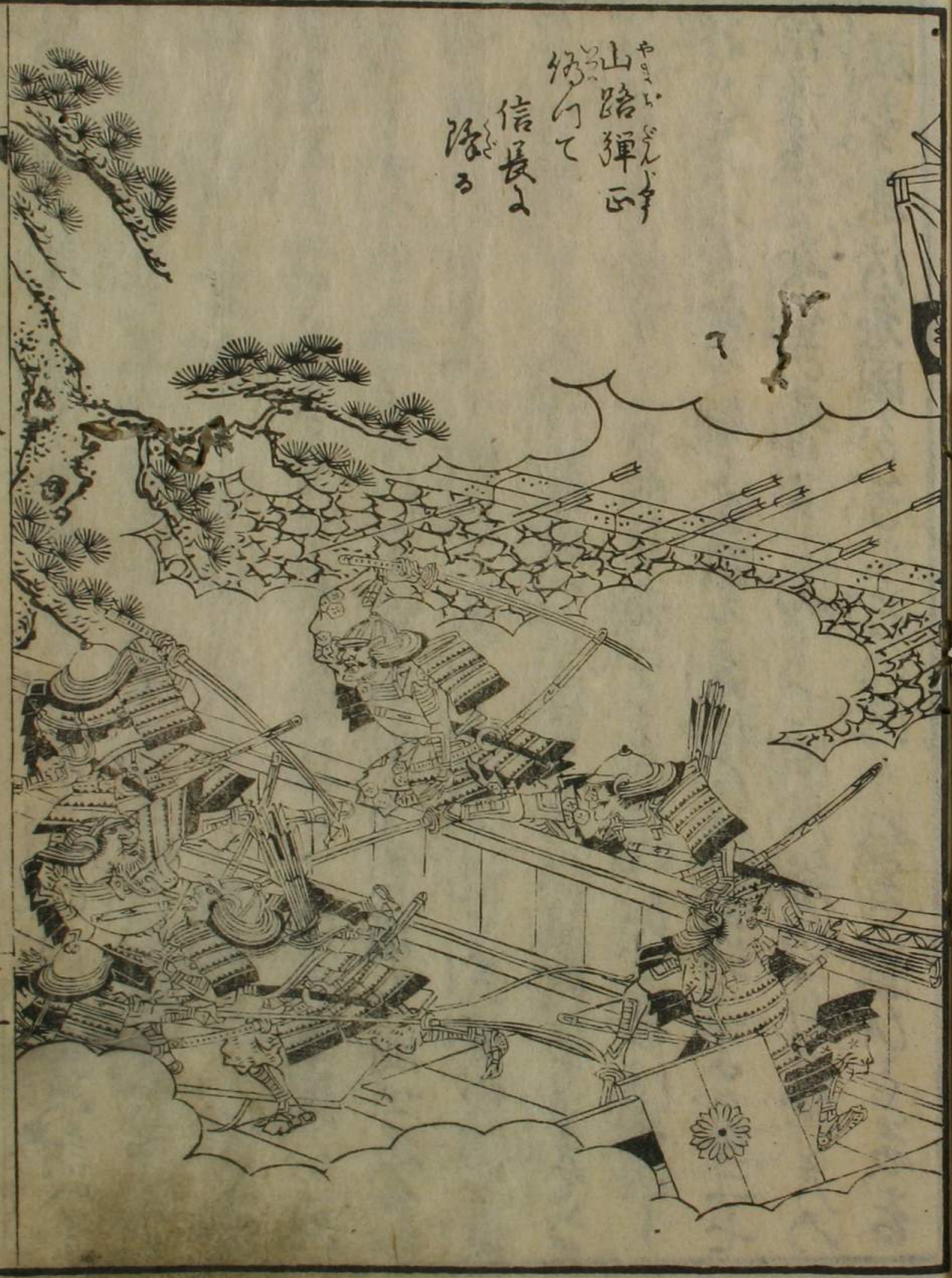
る園の城山路彈正力既とて攻系のように使へくれ信長
 諸翁を集めて攻候し強ふ耐よ本下屋敷進も出くも諸翁
 諸系仰りちるど進んで夷討一舉と城を系えべしと此
 田勝家後者公拒んで曰征伐仁を命て大進とれ山路彈正
 力足て攻を乞ふ強も懐入とれ人もこれを殺さど

今彈正を責殺す勢及びの士を不仁を悪んで奪取して攻
 略するのめりて死力を尽して防戦し終る勢別年治
 せんゆえ本は信長卿未心交せし衆後終くして更に空
 ちりたる所一坂阜の城より飛脚初来して甲及び田信玄
 の三老臣と計を合せて大軍と起し尾徳西園一丸を以
 て其の甚急之より軍とまじり御陣圍結しと追ひ
 飛脚争うべしが信長甚怒りて先發正が源系と免し
 争て事と計しと西園の用意をせしむる辰吉郎大に
 若しこそ必敵方智若めて流云をみて味方を奪ひ大
 軍と退らせし謀なりと身を操てあせりしと本園又變
 あふ此小城攻めて要ありと危候一變しと西園一丸ひ

けれ去後又信長卿三老臣及びて事を正統に交り據るま
 流云に武田家の此城は城後のと扱と合合中なれり外と
 責むるはななく其の信長と内縁の因もつれは毛段矣心交
 明白にお知れ且衆名の城を籠川九道一蓋より侵襲を以
 山路彈正源系の衆ありて是を以て捕七郎の謀計と
 以て之を落しして偽て源系なりと合戦を援め流云と
 小田の軍と退りしはよし具云とに及びしが信長は
 之に後悔し辰吉が先見神に通じたる人として感服を
 奉て征伐めえきし永禄十一年春二月尾徳尾張の軍勢
 悉く殲滅し其勢都合に万余騎衆名まで出陣しこのお
 りて分分を定め給ひ関八回安濃津細神戸を圍麻



中
山
路
彈
正
信
長
と
除
る



伏見園を等々の城へ一悉く軍勢を差向月時攻討べ
と其勢い盛に本下反古汁謀を以て江原の佐々木信長と
奴とと結ひ西の方より勢を攻るより流るるを以て軍
民甚怒と押のきる芝守村赤城福生の佐士等悉く路
系一先白より加りて大軍を以て園の城を圍せ反古即
信長の使者と如て歌城を詠き山路を説き其の路と進
めしが彈も不冷籠城叶ひじと云ひ然れども力尽る
討死と覚悟せしより反古が誠心を大に悦び心実な御伏し
津戸義人友軍を勧て和睦を以て結ぶ信長郷の子息三七
信者反を友軍の喜ぶるも以て因に結ぶしが津戸乃
一族等廉伏見園を攻るも苦に降りぬ反古は以て反古

山路と斗て安徳津と丸圍と長野の二族即後等とともめ
城を長時次郎の園田の舎守りたる大内河内(送)うす
信長の舎守三平即信通と安徳津の城を以て以てま
龜ふにあり安徳津守を攻る安徳津守は江原の一角兼復
が後結成れとて籠城せしより信長佐々木保元とありて
鈴原とと出張の山はわしより大に驚き信長の殊に素
て路系と結ひ又血ぬらばして勢を以て今ハ八回の
一城のより信長急攻討んとある所反古即制して捕
を人捨置たりとも何れを以て以て園田と苦に免れ角
も落居るべし山崎征伐を以て汁略を定めて向ふ所
とて瀧川一益を以て勢南と押させ同出たり

陣まじく々々

三好松永等弑義輝云

三好松永等弑義輝云
禽獸之物をまじく々々を離すとぞ
をまじく々々今人々してこれさ
禽獸の心かたじけなくは
御代よめて武威權勢大に衰へ
理ちま長安威を諸候のよ
一専ら天下の政勢掌り
く嫡男義輝云を征夷
振ふとくもま家細川を
あてをを紀一終るの
を一人も其下知を宵者
持政とるの教事
松永彈正久秀を
野倭邪智の曲者
將軍家と對し
おとく悔ろん
松永と謀り
るに密に細川が
強し
も松永彈正
白川に押寄

を一人も其下知を宵者
持政とるの教事
松永彈正久秀を
野倭邪智の曲者
將軍家と對し
おとく悔ろん
松永と謀り
るに密に細川が
強し
も松永彈正
白川に押寄

輝を討きんと三好長兼此強敵を愛と号し急
 上洛して松永と制し軍兵を返さし我輝云松永
 と和腹調へ暫く洛中待り多岐長慶齡既より
 子鏡守義長を以て國政を執りしむ時又永流に
 年三月三日三好義長館を抄ひし曲水の直を懼れ我
 輝云を始めたり在京の大名小名悉く寄集り流水よ
 羽觴を飛し和歌を詠し詩を吟し終日宴を懼れ
 くる去應仁の朝廷山名細川丸を發せしより公素既に百
 年にかんくとも天下一日も静かりし内裏の
 幼もとも幼もとも優たる懼し堂上より絶され
 ぐんぐんわらむ地して真ある限りは「わらわ

うや弥生れとういふ名に流さる花のさうづとと系
 極美門の極も流ひしも幼やうらんとやにしうりき此日
 松永彈正毒流を以て主君三好義長守義長と殺害と
 日席の諸侯豫り其子候を絶れとくも松永が権威み
 恐と散ては外よ出れぬの故長慶曾て松永が陰謀と知
 らん然傷み地を希へど家督のつを松永に任せ病床
 又却て立ち石松永之秀乃実よ抄ひし威勢益強く長
 慶が舎弟十河民部が男義経を以て長慶の妻と知
 一族三好日向守長縁日下野守政安岩松を脱奴通三人
 を後見とぬして京都と守護せしむと三好の三光臣と
 一皆松永が陰謀と組せし者之永禄七年三好長慶病



死と日八年松永久秀三老臣と斗を定むお軍義輝云は
 水寺へ詣り路次の警固にと仰り惟子の上と具足と備し
 兵卒を集るるに三万余人率に二条宣所の御所へ押寄せ
 彼を化て攻入るお軍家の近士と雖も一色馬本老部ある小
 林大館富山が小なる痛く防ぎ我れとすども元来不意に
 たりし甲冑を悉く者なく三好松永が多勢に及ばらば討
 死する者三十一人義輝も今いそいでなうと思ふは穉
 世とあがくて 又月雨露う候ふかきぎに我れ名取よ
 雲あふまで かくなん泳ぐ捨給ひて御領を援けけけ
 給ひ禮武若三勢切倒し多勢をせげ進み給ふと三好が
 即等池田丹後妻戸の陰に隠れ居て御足籠て打倒し

凌子を以て押却せりとうろ槍りと突通と其御殿の内
 火り出で松永御中と後て御首のを得て退きけり
 義輝云御年三十歳嗚呼此日いさる日ぞや足利家十二
 代のお軍遂臣のおよ裁せらと承く泉下の鬼とあはれ
 武運の末こそ悲しき

三好松永確執

三好の三老臣松永彈正等へ阿波の御所へまうくつる義
 弟云しり御方を京都へ運ばり禁廷へ奏し征兵お軍
 の職をや下しに人の者まよ政事を執給ふ爰に敵お軍
 義輝云の御令守麻苅寺より御座しを謀て討せり其
 の御連枝君達を悉く殺送し今御一人の御守南都一系

院の御門を覚慶と号しなる人も討集りてんと三好松永等
 其計區くわうする所細川義春其款を密に搦取石山本願寺の
 上人如く謂し三好松永不道ありて若くは殺し殺多の御連
 技悉く害し終り一系院の御門を今に生命を全ふし
 終りてふも以目急よ南都へ押寄討集りて定る中なる
 元来三好の三老臣の當院の擧げし一なるも他
 に誠より何れ一人の大慈悲心を以て三好が後を理を志めし
 門下の助命を命にしめ終りて軍家討し大功此上あり
 ども美泉の下に抄いとも故お軍義輝と一人の厚情と娘
 く抄い終りて二つにも擧げし三好が妻悪女を擧げし
 若めともいとも是二つをぐり上人の意となれしが若根此とや

いざれと血の涙をるべしとたのむらんが上人もいざ涙ぐ
 ませ終りて三好が方へ使僧をきしさまぐり
 終りて三老臣も上人の教化を先非を悔し覚慶君
 又抄いとも毛院害心しなれよ一紙をいとも人
 へ送りしは後天又恨び地又抄い上人は拜謝して南
 都に急ぐる松永彈正とて是を怒り三好一家の悪人系
 佛に滔卜僧を攻依し目赤の怨款を助け並首級を
 知り期よむりて後悔とも何の益もいとも不詮主君
 を殺害せし我れ中と折根と断べし法師ありとも
 助け並首級の禰りきりりよしく彼れ危もあし角も
 あれ我れ抄いとも生並とてと勢を勝つて三百余人

新
期
公

新
期
公



吉
兵
顯
言
初
七
日



十一

十一



三好
確松永
執



南都（大）をさし向る細川（大）なる先達（大）て石より西に南都
へ来り元芝（大）君（大）の子細（大）を云上り三奴松永内（大）を
生し必し一変とほし此陵（大）をちやく（大）安と適（大）たま
行方（大）とも御供（大）つり御先途（大）を見来り（大）とぞ（大）とぞ（大）
多し（大）元芝（大）君（大）も兄（大）の弑（大）せら（大）と移（大）ひ（大）し（大）今（大）の我（大）の
となりと押（大）ひ（大）定（大）め移（大）ひ（大）し（大）か履（大）高（大）が忠（大）志（大）よ力（大）を得
移（大）ひ（大）疾（大）く移（大）と（大）南都（大）と落（大）せ移（大）ひ（大）に及（大）矢崎（大）和回（大）守
賀守（大）が方（大）は暫（大）く思（大）ひ押（大）を（大）し（大）る去（大）程（大）は松永（大）が軍兵
南都（大）より元芝（大）を探（大）し（大）なれ（大）とち（大）落（大）失（大）移（大）ひ（大）る
移（大）方（大）を知（大）るがと（大）き（大）申（大）う（大）た（大）る（大）空（大）し（大）志（大）と（大）系（大）
ゆり松永（大）此（大）と（大）若（大）く久（大）秀（大）只（大）と（大）り（大）を（大）し（大）て悔（大）之（大）怒（大）り

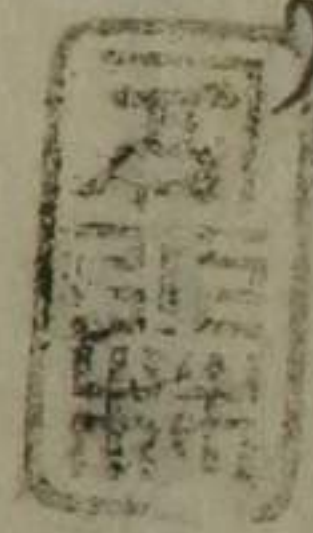
よりなき悪人の長（大）澄（大）依（大）りて勇（大）く後（大）敵（大）を討（大）りしぬ（大）し（大）
此人（大）他國（大）に去り武回（大）と松小田（大）小糸（大）なんどの大（大）家（大）に於（大）て兵
を揚（大）ぬ（大）部（大）は攻（大）来（大）りし未（大）遠（大）くも落（大）移（大）はし（大）ぬと（大）分（大）
探（大）せよとて道（大）國（大）道（大）在（大）一（大）間（大）者（大）を入（大）著（大）く探（大）り求（大）むと（大）文（大）
又（大）移（大）方（大）知（大）れ（大）ば（大）三（大）老（大）臣（大）を罵（大）り死（大）し（大）む（大）る（大）方（大）を（大）
ど安（大）よ押（大）ひ（大）し（大）三（大）奴（大）松永（大）確（大）執（大）及（大）ひ松永（大）島（大）と（大）か（大）ら
ひ三（大）奴（大）方（大）の條（大）系（大）を味（大）方（大）と（大）知（大）し（大）終（大）に合（大）戦（大）及（大）び（大）ら（大）が松
永（大）終（大）に敗（大）軍（大）して休（大）て和（大）交（大）と（大）乞（大）ひ（大）合（大）心（大）後（大）河（大）守（大）と（大）計（大）て
三（大）奴（大）義（大）繼（大）を振（大）と（大）乞（大）ひ（大）和（大）交（大）多（大）門（大）の城（大）を（大）據（大）こ
り三（大）奴（大）家（大）の阿（大）波（大）の御（大）所（大）守（大）立（大）大（大）軍（大）を發（大）し（大）南都（大）へ出
張（大）り佛（大）殿（大）を陳（大）を（大）松永（大）計（大）を（大）不（大）意（大）に疾（大）討（大）し

三奴松永

三

真言初卷

史を放つて焼討とほしも建連なる大佛殿回廊方丈厨
一字も跡も残らぬ所とある三好勢のうんぐく討負大和
にも海り得る系部さうて迹也里ぬ是より三好松永合我
共討ちし皆討ちも破らるるなり



繪本古圖記卷之八終

一



